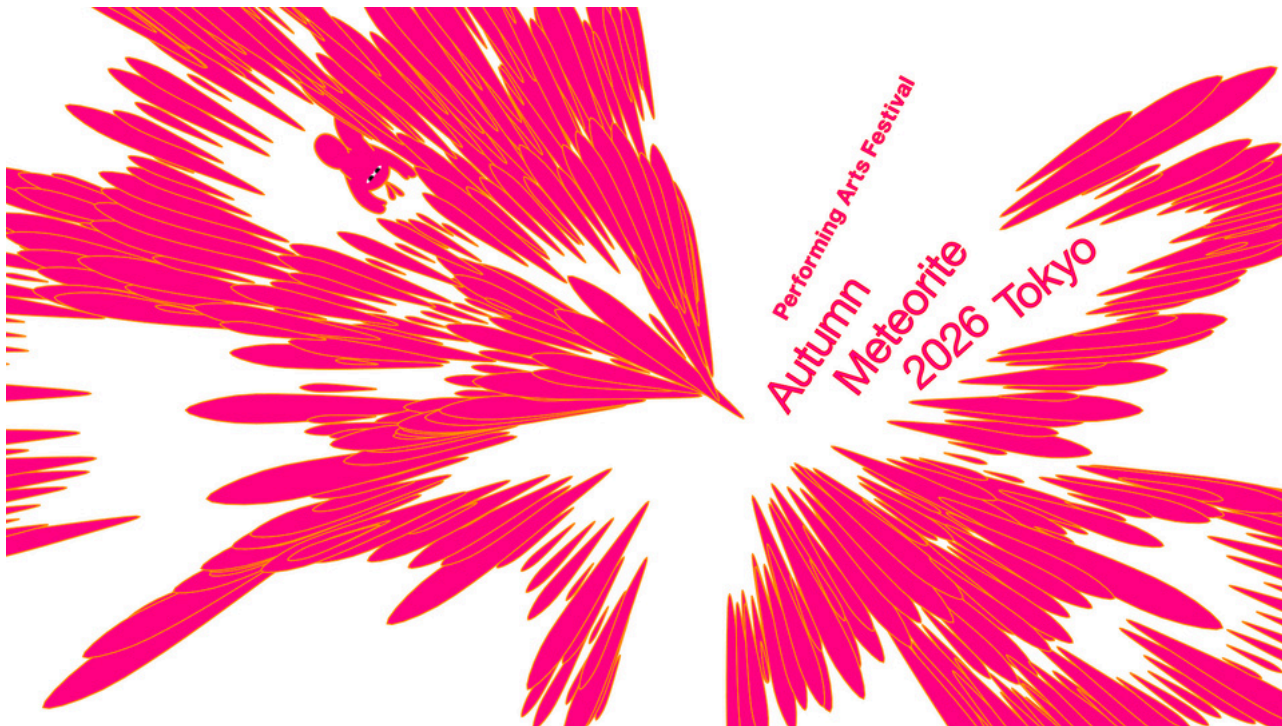


PRESS RELEASE

舞台芸術祭「秋の隕石2026東京」 全プログラムラインアップ発表のご案内



舞台芸術祭「秋の隕石2026東京」

Performing Arts Festival: Autumn Meteorite 2026 Tokyo

2026年10月9日（金）～11月3日（火・祝）

東京芸術劇場、GLOBAL RING THEATRE〈池袋西口公園野外劇場〉

<https://autumnmeteorite.jp>

東京舞台芸術祭実行委員会は、2026年10月9日（金）から11月3日（火・祝）にかけて池袋の東京芸術劇場を中心に開催する、舞台芸術祭「秋の隕石2026東京」の全プログラムラインアップを発表いたします。

報道関係の方からのお問合せ先

東京舞台芸術祭実行委員会事務局 「秋の隕石」広報担当：松本

Email：press@autumnmeteorite.jp

TEL：03-6812-1663（土日祝及び東京芸術劇場休館日を除く11:00～17:00）

目次

- P3 舞台芸術祭「秋の隕石」とは
開催概要
- P4 2026年度開催によせて
舞台芸術祭「秋の隕石」プログラム構成
- P5 ディレクターズ・メッセージ「隕石はウェルカムする」
- P8 「秋の隕石2026東京」スケジュール
アクセシビリティアイコン

上演プログラム

- P9 シアター能楽 英語能『青い月のメンフィス』
- P11 クリストファー・リューピング『渴望』サラ・ケイン作
- P13 振子びじん+YCAM『せいせいのせんせい』
- P14 あいたら エィ（新井英夫×板坂記代子×山田衛子）
『さん まるだが だんころ 3 ～音と動きのパフォーマンス～』
- P15 ジュンコエモト『真夜中に寂しくなったときに観たい演劇』 via Tokyo Metropolitan Theatre
- P16 アナカルシス・ラモス／ポルノトラフィコ『オカンとカネ』
- P17 ダダルズ 野外公演『よだれ観覧車』
- P18 ナディア・ブグレ『バーニング・ガールズ』
- P19 虹組ファイブ『第11回 虹組学園 秋の大文化祭』
- P20 岡田利規＆山田和樹 東京芸術劇場芸術監督 コラボレーション企画『静寂のガツンとした一撃』
- P21 花形 稔『エルゴノミクス胚』
- P22 山城知佳子『リコーリング(ス) — シアトリカル・バージョン』
- P23 アヒエ・エンジニアリング・シアター『白い部屋』
アヒエ ワークショップ「よく調律された間違いのためのインストラクション」(上演じゃないプログラム)
- P24 上演プログラム 提供素材一覧

上演じゃないプログラム

- P26 シビック・クリエイティブ・ベース東京 [CCBT] × 舞台芸術祭「秋の隕石」
Future Ideations Camp Vol.9：フィクション←テクノロジー→想像力
- P27 次はどこ？みて、はなすレジデンシー
- P28 海外プレゼンター招聘

ウェルカム体制（＝来場サポートのこと）

- P29 ウェルカム体制（＝来場サポートのこと）
アクセシビリティ設備＆サービス
鑑賞サポート
- P30 ウェルカムぎんが
- P31 こどもあそびシアター

- P32 チケット情報
- P34 会場（アクセス）
- P35 クレジット

舞台芸術祭「秋の隕石」とは

豊島区池袋の東京芸術劇場を中心に開催される舞台芸術祭「秋の隕石」。演劇作家・小説家であり、2026年度より東京芸術劇場 舞台芸術部門芸術監督に就任した岡田利規が、アーティスティック・ディレクターを務めます。

この芸術祭の主要なミッションは「新たな芸術の創造」「海外発信」「人材育成」です。国内外の多様な舞台芸術作品の上演とともに、世界で活躍できる舞台芸術人材の育成と国境を越えたネットワーキング構築プログラム等を実施し、芸術文化における国際交流を活性化させることを目指します。またアクセシビリティ向上の取組も積極的に行います。

岡田利規は、その独特なテキストと身体の関係性による独自の方法論を確立し、現代社会への鋭い眼差しと併せて国内外で高く評価されています。「秋の隕石」も、先進性や独自性、創造性そして国際性を備えたものへと発展し、より広く深く世界とつながってまいります。

開催概要

名称：舞台芸術祭「秋の隕石2026東京」

英語名称：Performing Arts Festival: Autumn Meteorite 2026 Tokyo

会期：2026年10月9日（金）～11月3日（火・祝）

会場：東京芸術劇場、GLOBAL RING THEATRE〈池袋西口公園野外劇場〉

主催：東京舞台芸術祭実行委員会〔東京都、東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）〕

共催：豊島区

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（国際芸術交流））

独立行政法人日本芸術文化振興会

ゴールドスポンサー：アサヒグループジャパン株式会社

シルバースポンサー：東武鉄道株式会社、三菱地所株式会社

ブロンズスポンサー：株式会社イープラス、株式会社ローソンエンタテインメント（五十音順）

メディアパートナー：Tokyo Art Beat

プログラム数：上演プログラム13演目、上演じゃないプログラム4事業、ウェルカム体制（＝来場サポートのこと）2事業



アサヒグループジャパン株式会社



2026年度開催によせて

岡田利規アーティストック・ディレクターのもと開催する2回目の「秋の隕石」は、今年も国内・海外の多様な舞台芸術作品13演目による「上演プログラム」、レクチャーやワークショップなどの「上演じゃないプログラム」、その両方を支える「ウェルカム体制（＝来場サポートのこと）」の3つを展開します。

国内外の先鋭的な作品を上演するとともに、国内のアーティストの発掘や新作の委嘱、アジアを拠点に活動するアーティストやプレゼンターを中心に国境を越えたネットワーク形成に取り組みます。

今年度も多様なプログラムを通じ、今、ここ、にある日本と世界の舞台芸術表現が、より身近なもの、自分と直接接続し腑に落ちるものとして捉えられるような、さまざまな現実の姿に気づき、あらたな視点でこの世界を捉え直すことができるような機会を創り出します。

舞台芸術祭「秋の隕石」プログラム構成



舞台芸術祭「秋の隕石」は、舞台芸術を通して、さまざまな人にあらゆる変動を引き起こします。そのために構成されるプログラムは3つのカテゴリーからできています。

ダンスや演劇、パフォーマンス・アート作品などの「上演プログラム」。

ワークショップやシンポジウムなどの「上演じゃないプログラム」。

そして「秋の隕石」をどなたにでも楽しんでもらうための「ウェルカム体制（＝来場サポートのこと）」。これは、各種のアクセシビリティの充実のみならず、皆さまを劇場でお迎えするために必要な、あらゆることを指します。

「秋の隕石」は誰にとっても、好きに過ごせる場所、何かが始まるかもしれない場所になります。

ディレクターズ・メッセージ

「隕石はウェルカムする」

この世界のありように大きく条件づけられて、わたしたちは生きている。そして、わたしたちの生の条件であるこの世界のいまのありようは、混乱を窮めている。

舞台芸術祭「秋の隕石」は、このことへの応答でありたい。この世界のありように応答せんとするあなたにとっての、ささやかにでも足しとなるような何かでありたい。

隕石たちは、わたしたちの属する地域／文化／価値観の、文脈の外から飛来する。それら隕石たちとの邂逅は、わたしたちを触発する。わたしたちには、隕石との邂逅に触発されて変容するポテンシャルが具わっている。

そこで生じうる変容を、この世界のありようへの応答の一端であるとわたしは考える。ゆえにわたしはこの変容に、価値と可能性を見る。

舞台芸術祭「秋の隕石」は、隕石たちをウェルカムする。同様に、隕石への関心たち、好奇心たちをウェルカムする。それら関心たち・好奇心たちの、隕石たちとの邂逅が起こるのを待望する。

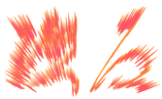
だからわたしたち舞台芸術祭「秋の隕石」は、2026年も〈ウェルカム体制〉を敷く。隕石たちへのアクセスがなんらかの原因で阻害され、起き得たはずの遭遇が果たされない、ということが起こらないよう、できうるかぎりの〈ウェルカム体制〉でいく。会期にわたって「こどもあそびシアター」が開催され、子育て期にあるあなたの観劇をサポートする。音声ガイドや字幕の提供も、多くのプログラムで実施する。

舞台芸術祭「秋の隕石2026東京」は、振子びじん+YCAM（山口情報芸術センター）による、子どもも楽しめる参加型パフォーマンス『せいせいのせんせい』で幕を開ける。AIロボットの〈せんせい〉の授業を受ける体裁をとる本作は、人間とは？ 私とは？ という根源的な問いに触れている。『せいせいのせんせい』は、それがあまりにも根源的であるがゆえに子どもじみた問いとしか見なせなくなってしまった大人たちのためのものでもある。

筋萎縮性側索硬化症（ALS）の診断を4年前に受けたダンスアーティスト・新井英夫に、舞台芸術祭「秋の隕石」は新作を委嘱した。新井と板坂記代子、山田衛子の3名からなるコレクティブ・あいたら エィの『さん まるだが だんころ 3～音と動きのパフォーマンス～』に立ち会うわたしたちの知覚と感性は、病状の進行にともなって更新され続ける新井の視座とダンスに導かれて、この世界に漂うかすかな揺らぎ・音・気配へとひらかれていくだろう。

エルヴィス・プレスリーの亡霊がシテである能。日本語以外の言語で演じられる能。それってキワモノか？ 断じて違う。能という、高い汎用性を具えた〈ニッポンの〉パフォーミング・アーツのフォーマットが文化を越境して実践されるのも、そこから傑作が生まれるのも、じつに自然な成り行き。その紛れもないひとつの実例、シアター能楽の英語能『青い月のメンフィス（Blue Moon Over Memphis）』を、舞台芸術祭「秋の隕石2026東京」は紹介する。

昨年度に続けて、シビック・クリエイティブ・ベース東京〔CCBT〕と舞台芸術祭「秋の隕石」がコラボレーションして、未来提案型キャンプを実施する。今年のタイトルは『フィクション←テクノロジー→想像力』である。演劇は、観客の想像力が関わることによってフィクションを成立させていく表現形式である。それを、デジタルテクノロジーによってどのように本質的に拡張しうるか？ これは、隕石を孵化させるべく開かれる4日間のキャンプである。



レズビアンに向けて、レズビアンが表象される演劇。レズビ안의欲望が、レズビ안의享楽が、レズビアン寂しさが、レズビアン身体によって演じられる演劇。レズビアンであることが当然の前提として上演される演劇。江本純子はそのような演劇を欲した。そしてそれを自ら形にした。それがジュンコエモト『真夜中に寂しくなったときに観たい演劇』である。異性愛の価値観が圧倒的に支配するこの社会で、この演劇は、隕石にほかならない。

メキシコの現代史は、グローバルな新自由主義のプロセスがもたらしたメキシコの経済危機の常態化の歴史でもある。その影響に苦しむのは、その社会を生きる人びとにほかならない。生活と魂をどこまでも浸食してくる労働。この他人事とおもえないテーマを、アナカルシス・ラモス／ポルノトラフィコによる『オカンとカネ』は、ドキュメンタリー映画の手法と掛け合わされた現代演劇としてみずみずしく扱う。この60年にわたって就いてきた数々の職について語り、そのいくつかを舞台上で再現してみせるアナカルシスの実の母親・ホセフィナがたまらなくチャーミングだから、ぜひ見てほしい。

サラ・ケインの書いた言葉は、マーガレット・サッチャー時代の苛酷なイギリスを生きた傷ついた魂が遺したレガシーだ。そしてそれは、いまのわたしたちにこそ刺さってくる。クリストファー・リュウピングの演出によって、サラ・ケイン『渴望（原題：Crave）』の、ストーリーを持たない断片的なテキストのスコアは、わたしたちの柔らかい心に痛みと慰撫のかけがえのない経験をもたらす上演となった。このベルリン・ドイツ座のレパートリーを、舞台芸術祭「秋の隕石2026東京」は招聘する。

ダダルズ・大石恵美は、強烈な異物性を帯びている。論理性の皮をかぶったナンセンスや飛躍に次ぐ飛躍で展開するテキストを書く大石は、自ら観客の前に、無防備な徒手空拳状態で立ち、それを語る。そして、問いかける。この社会の、わたしたちの、不条理を、欺瞞を、照射する。どこから見ても〈隕石〉である。舞台芸術祭「秋の隕石2026東京」では、ダダルズ『よだれ観覧車』を、東京芸術劇場前のGLOBAL RING THEATRE〈池袋西口公園野外劇場〉で上演する。この野外公演は、事件となるだろう。

いまだ男性中心主義のもと稼働するこの社会にあって“女性らしさ”もまた奨励され（＝押しつけられ）続いている。この現実には立ちおぼえるあなたの、その抵抗の意志を鼓舞する隕石として、舞台芸術祭「秋の隕石2026東京」はナディア・ブグレ『バーニング・ガールズ』を招く。コートジボワールの都市を生きるふたりの、燃えるような、毅然としたガールズが、男性的肉体の誇示のために踊られているダンスを男たちから奪取してバキバキにキメる。なお本作は、後述されるアヒュ・エンジニアリング・シアター『白い部屋』とあわせて、昨年度に続き山口遥子氏にキュレーションを依頼しプログラムされた、オブジェクトシアター作品で（も）ある。

虹組ファイツは、ゲイアイドルサークルである。2009年に「アイドルごっこ」をコンセプトに結成されて以来、現在にいたるまで17年にわたり、日本各地で旺盛に活動が続けている。この、長い活動の歴史を持つサークルの存在そのものが、すでにひとつの隕石である。舞台芸術祭「秋の隕石2026東京」は虹組ファイツ『第11回 虹組学園 秋の大文化祭』をプログラムのひとつとし、彼らのプレゼンスをプレゼントしたい。

大きな吹き抜けを有する東京芸術劇場館内のアトリウムは、そこにいる人びとすべてに静粛さを要請することなどそもそも不可能な公共空間だ。そこ全体を会場にして、小さな音・沈黙、というコンセプトを前面に押し出した、一日限りの無料パフォーマンスを敢行する。山田和樹の指揮による音楽の演奏と、岡田利規の書き下ろすテキストの朗読からなる『静寂のガツンとした一撃』は、消えゆくものに知覚と想像力を向ける誘いともなるだろうし、この世界にあふれる無数の、届かない声、透明にさせられている存在のアナロジーともなるだろう。これは今年度から東京芸術劇場の音楽部門の芸術監督となった山田と、舞台芸術部門の芸術監督となった岡田のきわめて未知数な、初コラボレーションとなる。

昨年度の「秋の隕石2025東京」での公開実験及びその後のクリエーションを経て、今年の「秋の隕石2026東京」で花形 榎『エルゴノミクス胚』のフル・スケール公演が、いよいよ初演される。花形らパフォーマー数人の、椅子へと変態（メタモルフォーシス）しようという意志と欲望が、AIやモーションキャプチャといった最新テクノロジーの助太刀を得ながらまさに目の前で果たされんとする場に、わたしたち観客は立ち会おうだろう。それは圧倒的な隕石みを帯びた、未知の体験となるだろう。

『リコーリング（ス） — シアトリカル・バージョン』は、沖縄の歴史や状況を多層に複雑なまま提示する映像作家・山城知佳子が手掛ける“パフォーミングアーツ作品”である。本作の主な構成要素となっているのは、戦争にまつわる記憶をテーマとする映像たちだが、そこには沖縄についてのもののみならず、東京やパラオで取材し撮影されたものも多く含まれている。それらが、音響やタイムラインの構成上のさまざまな趣向をともなっており、劇場空間に配置される。記憶をめぐる思索を促す媒介そのものともいえるこの舞台芸術作品『リコーリング（ス） — シアトリカル・バージョン』を、わたしたち舞台芸術祭「秋の隕石」は、沖縄との非対称性においてもっとも象徴的な地・東京で開催される催しであることへの自覚とともに、紹介する。

1989年にサンクトペテルブルクで設立されたアヒエ・エンジニアリング・シアターのメンバーは、60歳を超えた現在もなおヨーロッパを拠点に精力的に活動する、オブジェクトシアター界のリビング・レジェンドたちである。彼らが30年以上前の若き日に創作した代表作『白い部屋』の上演を、舞台芸術祭「秋の隕石2026東京」はプログラムのひとつとした。ユーモアを引き連れて次から次へと溢れ出す詩情を、そのことがそのまま政治的な表現となってもいることへの感嘆とともに、堪能してほしい。

このような隕石たちを用意して、舞台芸術祭「秋の隕石2026東京」は、隕石との邂逅を求めてやってこようとするあなたを、ベストを尽くしてウェルカムする。

舞台芸術祭「秋の隕石」アーティスティック・ディレクター
東京芸術劇場 舞台芸術部門芸術監督

岡田利規／Toshiki Okada

プロフィール

演劇作家、小説家、演劇カンパニー「チェルフィッチュ」主宰。その手法における言葉と身体の特異な関係が注目される。2005年『三月の5日間』で第49回岸田國士戯曲賞受賞、2007年クンステン・フェスティバル・デザール（ブリュッセル）参加。以降、国内外の90都市以上で新作を旺盛に上演し続けている。2016年以降、ドイツ語圏公立劇場のレパートリー作品の作・演出も継続的に務め、2020年『掃除機』及び2022年『ドーナ（ツ）ツ』でベルリン演劇祭に選出。また、2015年日韓キャストによる『God Bless Baseball』、2018年ウティット・ヘーナム原作・タイキャストによる『プラターナー：憑依のポートレート』（第27回読売演劇大賞・選考委員特別賞受賞）、2023年ウィーン芸術週間委嘱作品『リビングルームのメタモルフォーシス』など、国際共同制作作品も多数。その活動は研究者からも関心を集め、2021年『Okada Toshiki & Japanese Theatre』が出版される。小説家としては、2007年に『わたしたちに許された特別な時間の終わり』を刊行、第2回大江健三郎賞受賞。2022年に『プロックリー・レボリューション』で第35回三島由紀夫賞および第64回熊日文学賞を受賞。ほか、能・狂言の形式を用いた作品や、現代語訳も手がけ、2022年『未練の幽霊と怪物 挫波／敦賀』（第72回読売文学賞・戯曲・シナリオ賞及び第25回鶴屋南北賞受賞）、2026年『現代語訳 風姿花伝・三道』（河出書房新社）を発表。2025年度より舞台芸術祭「秋の隕石」アーティスティック・ディレクター、2026年度より東京芸術劇場 舞台芸術部門芸術監督を務める。



photo: Usuyama Kikuko

「秋の隕石2026東京」スケジュール

カテゴリー	詳細ページ番号	プログラム名	日程	会場
上演プログラム	p. 13	振子びじん+YCAM 『せいせいのせんせい』	10月9日（金） ～10月12日（月・祝）	東京芸術劇場 シアターウエスト
上演プログラム	p. 14	あいたら えい（新井英夫×板坂記代子×山田衛子） 『さん まるだが だんころ 3 ～音と動きのパフォーマンス～』	10月9日（金） 10月12日（月・祝）	東京芸術劇場 シアターウエスト
上演プログラム	p. 9 - 10	シアター能楽 英語版『青い月のメンフィス』	10月10日（土） ～10月11日（日）	東京芸術劇場 プレイハウス
上演プログラム	p. 15	ジュンコエモト 『真夜中に寂しくなったときに観たい演劇』 via Tokyo Metropolitan Theatre	10月16日（金） ～10月18日（日）	東京芸術劇場 シアターウエスト
上演プログラム	p. 16	アナカルシス・ラモス/ボルノトラフィコ 『オカンとカネ』	10月16日（金） ～10月18日（日）	東京芸術劇場 シアターウエスト
上演プログラム	p. 11 - 12	クリストファー・リューピング 『渴望』サラ・ケイン作	10月17日（土） ～10月18日（日）	東京芸術劇場 プレイハウス
上演プログラム	p. 17	ダダルス 野外公演『よだれ観覧車』	10月17日（土） ～10月18日（日）	GLOBAL RING THEATRE （池袋西口公園野外劇場）
上演プログラム	p. 18	ナディア・ブグレ 『バーニング・ガールズ』	10月23日（金） ～10月25日（日）	東京芸術劇場 シアターウエスト
上演プログラム	p. 19	虹組ファイブ 『第11回 虹組学園 秋の大文化祭』	10月25日（日）	東京芸術劇場 シアターウエスト
上演プログラム	p. 20	岡田利規&山田和樹 東京芸術劇場芸術監督 コラボレーション企画 『静寂のガッソとした一撃』	10月25日（日）	東京芸術劇場 アトリウム
上演プログラム	p. 21	花形 慎 『エルゴノミクス胚』	10月29日（木） ～11月1日（日）	東京芸術劇場 シアターウエスト
上演プログラム	p. 22	山城知佳子 『リコーリング(ス)ー シアトリカル・バージョン』	10月30日（金） ～11月3日（火・祝）	東京芸術劇場 プレイハウス
上演プログラム	p. 23	アヒエ・エンジニアリング・シアター 『白い部屋』	10月31日（土） ～11月2日（月）	東京芸術劇場 シアターウエスト
上演じゃないプログラム		アヒエ ワークショップ 『よく調律された間違いのためのインストラクション』	10月21日（水） ～10月25日（日）	東京芸術劇場 ギャラリー1
上演じゃないプログラム	p. 26	シビック・クリエイティブ・ベース東京 [CCBT] × 舞台芸術祭「秋の隕石」 Future Ideations Camp Vol.9: フィクション←テクノロジー→想像力 キャンプ	10月10日（土） ～10月13日（火）	東京芸術劇場 ギャラリー2
上演じゃないプログラム		シビック・クリエイティブ・ベース東京 [CCBT] × 舞台芸術祭「秋の隕石」 Future Ideations Camp Vol.9: フィクション←テクノロジー→想像力 成果展示	10月15日（木） ～10月18日（日）	
上演じゃないプログラム	p. 27	次はどこ？みて、はなすレジデンシー	10月22日（木） ～11月2日（月）	—
上演じゃないプログラム	p. 28	海外プレゼンター招聘	10月24日（土） ～11月2日（月）	—
ウェルカム体制 （＝来場サポートのこと）	p. 30	ウェルカムざんが	10月9日（金） ～11月3日（火・祝）	東京芸術劇場 ロワー広場 ほか
ウェルカム体制 （＝来場サポートのこと）	p. 31	こどもあそびシアター	10月9日（金） ～11月3日（火・祝）	東京芸術劇場 アトリエイスト ほか

アクセシビリティアイコン



音声ガイド



タッチツアー



日本語舞台上字幕



バリアフリー日本語字幕（ポータブル字幕）



ヒアリングループ（磁気ループ）作動



鑑賞に不安のある方にお勧め



車いす席



子どもが楽しめる



託児

演劇

ダンス

音楽

日本

アメリカ

イギリス

シアター能楽

英語能『青い月のメンフィス』

エルヴィス・プレスリーの亡霊と生者ジュディが出逢う「夢幻能」

伝統芸能の形式を尊び広げる、英語能が秋の隕石にやってくる



日程：2026年10月10日（土）～11日（日）

会場：東京芸術劇場 プレイハウス

開演	10.10 Sat	10.11 Sun
14:00		○★
18:00	●	

○＝聞こえない・聞こえにくい方のための「バリアフリー日本語字幕（ポータブル字幕）」を実施いたします。（要予約）

★＝終演後に約30分間のポスト・パフォーマンス・トークを予定しています。

作：デボラ・ブレヴォート

作曲・音楽監督：リチャード・エマート

共同演出：松井彬、ジョン・オグルビー



シアター能楽は2000年にエマート氏をはじめ能を学ぶ英語話者によって設立され、今も国際的に活動している。シアター能楽が英語で上演する創作能『青い月のメンフィス（Blue Moon Over Memphis）』。アメリカの劇作家デボラ・ブレヴォートが能に着想を得て、「キング・オブ・ロックンロール」と称され音楽史に多大な影響を与えたエルヴィス・プレスリーを題材に執筆した戯曲を下敷きとしている。死者と生者の邂逅を描く夢幻能そのままに、エルヴィス（シテ）の熱烈なファンである女性ジュディ（ワキ）が、命日に墓を訪れ、青い月の光に導かれてその亡霊と出会う物語である。

能舞台、笛や鼓による囃子、地謡、舞、本歌取りなど能の様式に忠実に、ブルースやゴスペル、エルヴィスのヒットナンバーや彼をモデルにした新作能面、デニム素材の装束といった米国文化の要素が取り入れられている。異なる言語やモチーフを大胆に採用しながらも、あるいはだからこそ、能の普遍性や懐の深さがストレートに伝わる。新作英語狂言『節度の報い（The Rewards of Humble Abstinence）』も併せて上演する。

プロフィール

シアター能楽／Theatre Nohgaku

アメリカ、日本、イギリス、スウェーデンを拠点とするメンバーで構成された国際的なパフォーマンス・カンパニー。2000年にリチャード・エマートと、能の高度な技法を修めた英語話者のパフォーマーたちによって設立され、能への深い情熱を共有するとともに、それが現代の観客にも強い力を持つという確信を抱いている。

主に英語による新作能および能に着想を得た作品の創作を行うほか、日本の能楽師との協働により、日本語および英語でオリジナル作品や伝統作品の上演も行っている。また、能の芸術を観客や一般の人々に広く紹介することも重要な目的としており、その一環として、アメリカ、日本、イギリスにおいて、非日本人を対象とした能のワークショップを毎年実施している。

最近の作品は、文化や言語の垣根を越え、人間に共通する普遍的な物語を描き出している。アメリカやイギリスに加え、アイルランド、フランス、日本、中国でツアー公演を行ってきたほか、日本でも伝統的な能公演に二度招聘されている。



英語能『青い月のメンフィス』 初演：2015年5月23日（会場：繪処アラン・ウエスト）

出演：

シテ（エルヴィス・プレスリー）：ジョン・オグルビー

ワキ（ジュディ）：ローラ・サムソン／ミカ・オスカソン・キンドストランド

アイ狂言（オスカー）：ルイス・バイス

笛：リチャード・エマート

小鼓：大村華由

大鼓：河内孝子

太鼓：桜井均

地頭：デビッド・クランドル

地謡：ケビン・サルフェン、デビッド・サタースキー、マシュー・デュブロフ、アシュレー・ソープ、ゲイ
リ・マシューズ、ロバート・モリス、章舒涵

後見：大島衣恵、ジュビリス・モーア

狂言『節度の報い』

作：トーマス・オコナー

共同演出：トーマス・オコナー、ルイス・バイス

出演：

シテ（司祭）：ジュビリス・モーア

アド（犬）：ルイス・バイス

舞囃子『高砂』

出演：松井彬／大島衣恵

地頭：塩津圭介

■柳井イニシアティブ発行『エルヴィスの幽玄』より

“エルヴィスは二度と同じようには聞こえない”

ートーマス・オコナー

“エルヴィスを、薬物に溺れて妄想がひどくなっていく文化の盗用者としてただ貶すのではなく、彼の孤独の「時間」を展開することで、一つの人生という旅が表現された時空を観客に見せる。

ある人物の人生を、消費しやすくなるように噛み砕くのではなく、その逆を行くのだ。

この能はエルヴィスの人生における一秒を文字通り「爆発」させたり拡張させたりしている。

観客がさまざまな角度から考えられるようにするだけでなく、地謡、囃子、立方、能面、衣装（装束）が表現する「多様な息遣い」によって視覚的な演出も行われる。

これらすべての要素が織りなす複雑なキャンバスが、観客の前に立ち上がるのである。”

ージョン・オグルビー



撮影：デビッド・サタースキー

詳細はこちら（公式WEBサイト）



演劇

音楽

ドイツ

クリストファー・リューピング

『**渴望**』サラ・ケイン作

ヨーロッパの最先鋭、鬼才リューピング作品が待望の初来日！
夭折したサラ・ケインのテキストに今もなお響く
アクチュアリティをえぐり出す怪作を目撃せよ



©Thomas Aurin

日程：2026年10月17日（土）～18日（日）

会場：東京芸術劇場 プレイハウス

開演	10.17 Sat	10.18 Sun
17:00		○■
18:30	○■★	

○＝聞こえない・聞こえにくい方のための「バリアフリー日本語字幕（ポータブル字幕）」を実施いたします。（要予約）

■＝「英語字幕タブレット貸出」を実施いたします。（要予約）

★＝終演後に約30分間のポスト・パフォーマンス・トークを予定しています。



演出：クリストファー・リューピング

作：サラ・ケイン

出演：マヤ・ベックマン、ベンヤミン・リリエ、ザシャ・メルロッホ、ヴィプケ・モレンハウアー、
 スティーヴン・アジェイ・ソヴァ

演奏：クリストフ・ハルト、ヨナタン・ヘック、タベア・シュレンク、コーエン・シュトロークン

企画制作：チューリヒ劇場／ベルリン・ドイツ座

助成：ドイツ外務省

協力：ゲート・インスティトゥート東京

後援：ドイツ連邦共和国大使館

Deutsches
Theater

GOETHE
INSTITUT

Federal Foreign Office

ドイツ連邦共和国大使館
東京

現在ドイツ語圏演劇界で最も注目を集める演出家のひとり、クリストファー・リューピングの作品を初めて日本で上演する。リューピングは**舞台上の俳優が頻繁に観客に対して語りかけるような演出が特徴**で、岡田利規とは同時期にミュンヘン・カンマーシュピーレ劇場で邂逅している。両者はお互いに強く関心を寄せ合っており、今回「秋の隕石」で待望の招聘が実現した。

原作は、28歳でこの世を去ったイギリスの劇作家サラ・ケインの戯曲『CRAVE（渴望）』（1998年初演）。ストーリー性がなく、登場人物4名はアルファベットでのみ示されその関係性は不明、詩のように断片的で過激さもある、**ケイン独特の強度の高いテキスト**である。**ケインの戯曲との出会いにより演劇の道に進んだ**リューピングは、**原作にはない5人目の役を考案し演出した**。その役は舞台上の椅子に座り、一言も発さない。他の4人が5人目に強いセリフを投げつけると、その度に大きなスクリーンに映し出される表情は細やかに反応し、変化する。

息つく間もなく発せられ続ける時に残酷な言葉、それを受け止める5人目の俳優という〈媒体〉と、その5人の関係性――。リューピングは、**30年前のケインの戯曲に描かれている人間の夢、不安、怖れ、暴力性、希望、救いを求める切実さという時代を超越した本質を、この演劇という行為をもって今・この観客に改めて突きつける**。5人目の役を演じ、ドイツで名だたる演劇賞を獲得している**モレンハウアーの名演技**も見逃せない。

プロフィール

演出：クリストファー・リューピング／Christopher Rüping

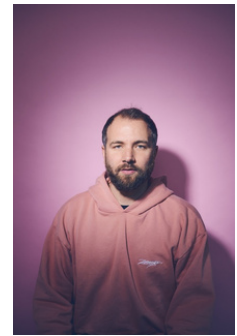
現在ドイツ語圏演劇界で最も重要な演出家の一人。やわらかくかつ熱量の非常に高いその演出作品は、長年にわたり密に協働する俳優や美術家等のチームに支えられている。1985年ハノーファーに生まれ、ハンブルク演劇アカデミーとチューリヒ芸術大学で演出を学んだ後、フリーの演出家としてドイツ語圏の劇場で演出をスタートした（ハンブルク・タリア劇場、ベルリン・ドイツ座、シュトゥットガルト州立劇場など）。

2016年より19年まで、マティアス・リリエントールが芸術総監督をつとめたミュンヘン・カンマーシュピレ劇場演出家として活躍。この時期すぐれた演出作品を次々に生み出し、高い評価を得て各地に招聘される。主な作品にブレヒト『夜打つ太鼓』、シェイクスピア『ハムレット』、ギリシャ古典劇をベースにした上演が10時間におよぶ『ディオニュソス・シティ』など。

2019年より24年まで、劇場演出家としてチューリヒ劇場ディレクションチームの一翼を担った。同劇場で家族3部作の第1作としてジャン＝リュック・ラガルズ『たかが世界の終わり』を手がけ、その後第2作川上未映子『乳と卵』をハンブルク・タリア劇場で、第3作マックス・ポーター『悲しみは羽根のあるもの』をボッフム劇場で演出した。さらにチューリヒ劇場で『渴望』（サラ・ケイン作）を演出。待ち望んでいた劇作家サラ・ケイン作品との再会だった。そもそもリューピングの関心を演劇に向けたのが、サラ・ケインの戯曲だった。

リューピングの演出作品はこれまで数々の賞を受賞している。ベルリン演劇祭には5度招聘され、重要な国際フェスティバルにも招かれている（テヘラン、プラハ、台北、サンクト・ペータースブルク、北京など）。ベルリン・ドイツ座との縁も長い。初演出は2013年ドイツ座Boxで、その後ドイツ座の中・大劇場で4作品を演出した。『たかが世界の終わり』と『渴望』はチューリヒ劇場からドイツ座に移され、リューピングとドイツ座、そしてその観客の間の関係に、新たなページが加わった。

ドイツ座の2026/27シーズンは、クリストファー・リューピングの新作『ドイツの秋』（共同製作：ルール・トリエンナーレ）で幕を開ける。



© Urban Zintel

作：サラ・ケイン／Sarah Kane

20世紀末のイギリス演劇に鮮烈な足跡を残した劇作家。生涯に戯曲を5作、映像脚本1作を残した。デビュー作『爆破されて』（1995）は、戦争や性暴力を描く過激な表現で大きな論争を巻き起こしたが、エドワード・ボンドやハロルド・ピンターらからは高く評価された。続く『フェドらの愛』と『浄化』も国内では同様の評価だったが、国外、特に欧州でその革新的な劇作構造が注目されるようになる。その後の『渴望』は、愛、欲望、孤独、暴力といった人間の根源的な感情を、詩的かつ大胆な言語で描き出し、国内外で評価を獲得した。1999年、『4.48サイコシス』を完成させた直後に28歳で自ら命を絶った。極限状態にある人間の精神を見つめ続けたその作品群は、今日なお世界各地で上演され、現代演劇のモダン・クラシックとして読み継がれている。

■劇評

“言語によるフーガはますます勢いを増していく。それは音楽のみならず、そのテーマである愛によっても駆動されているのだ。”

ーウエリ・ベルナイズ（『ノイエ・チューリヒャー・ツァイトウング』、2023年3月6日）

“リューピングは、テキストの音楽性を取り込んでいる。モレンハウアーの顔には「耳にする言葉に対する反応の、極めて微細なニュアンス」が見て取れる。その顔は自身の感情の鏡となり、観る者を引き込み、純粋な魅惑そのものである。”

ーエグベルト・トール（『南ドイツ新聞』、2023年3月7日）

“このあまり心地よいとは言えない混合物を、私たちは手放したくない。ごく少数の演出家しか生み出せないようなこの強烈さは、純粋な献身以外の何物をも求めない。”

ービョルン・ハイヤー（『フライターク』、2023年3月7日）

“魔法のような瞬間を目撃した。「その顔は、まるで裸で無防備なようで、その表情は極めて繊細な地震計のようだ。」

ーサロメ・マイヤー（『フランクフルター・アルゲマイネ新聞』、2023年3月8日）



©Thomas Aurin



©Orpheas Emirzas



©Thomas Aurin

詳細はこちら（公式WEBサイト）



演劇

メディアアート

日本

振子びじん+YCAM 『せいせいのせんせい』

2026年の秋の隕石は子どもとAIといっしょに開幕！

〈人間〉という存在ってなんだろう？を考える、AIロボットとの学び合い



撮影：守屋友樹 写真提供：山口情報芸術センター [YCAM]

演出・構成・出演：振子びじん

原作：斧田小夜

企画制作：山口情報芸術センター [YCAM]



日程：2026年10月9日（金）～12日（月・祝）

会場：東京芸術劇場 シアターウエスト

開演	10.9 Fri	10.10 Sat	10.11 Sun	10.12 Mon
11:00		★○	★■	★
15:00			★■	
16:30	★			
18:00		★○		

※集合時間は各公演の20分前になります。集合時間に遅れると入場できない可能性があります。

★＝全公演、終演後、体験を振り返る哲学対話を行います。ぜひご参加ください。

○＝聞こえない・聞こえにくいの方のための「リアルタイム字幕」を実施いたします。（要予約）

■＝英語通訳者によるサポートを実施いたします。（要予約）



劇場で、ロボットせんせいに人間のことをおしえる先生になりませんか？

AIは急速に私たちの日常へ入り込み、暮らし方やコミュニケーションのあり方までも変えている。**人類の発した言葉などの集合体であるテクノロジー。そんな〈かれら〉と、人間はどう向き合えばよいのか。**わたしたちの日常にすでにはっきり存在しているこの問いは、今後ますますその複雑さを増していく。そして、**この社会の未来を担う子どもたちは、これからの人生の長い時間のなかで、大人たち以上にこの難題と取り組んでいくことを課されている。**

ダンサー・振付家の**振子びじんと山口情報芸術センター [YCAM] のコラボレーション**で制作したパフォーマンス作品。**小学4年生以上の子どものから参加できる。**振子はかつて「大駱駝艦」に在籍し、ダンサーとしてのキャリアをスタート。現在は声と体の動きが影響し合いながら生まれる身体を扱う作品を手がけている。本作では演出・構成を担当し、AIとロボット、そして人間が「生成」を通じてともに学ぶ授業を描きだす。

教室のように並ぶ机の上のロボットには「いつでも話しかけてOK」。観客がロボットの〈せんせい〉と「海の水ってどんな味？」「ドキドキするってどんな感じ？」といったやりとりを交わすと、**学習し続けたロボットはやがて授業を〈せいせい〉し、その場はAIどうしのコミュニケーションの渦となる――。**わたしたちは、そこにどのように立ち会うことができるだろうか。

プロフィール

演出・構成・出演：振子びじん／Pijin Neji

ダンサー・振付家、neji&co.主宰。2004年まで、舞踏家・鷹赤児が率いる「大駱駝艦」に所属。その後、自身の作品づくりを始め、声や体の動きが影響を与え合いながら変化する身体のある方に注目した作品を発表している。

2011年、横浜ダンスコレクションEX審査員賞、フェスティバル/トーキョー公募プログラムF/Tアワード受賞。2016年、Our Masters土方翼「異言/glossolalia」キュレーター。2024年、穴迫信一×振子びじんwithテンテンコ『スタンドバイミー』共同演出、2020～2023年、neji&co.『コロナリポート』三部作など。

企画制作：山口情報芸術センター [YCAM]

山口情報芸術センター [YCAM] (Yamaguchi Center for Arts and Media) 通称「YCAM (ワイカム)」は、山口県山口市にあるアートセンター。

2003年の開館以来、研究開発チームYCAM InterLabを中心に、アーティストとのコラボレーションを通じて、同時代のテクノロジーを活用した作品の制作・発表を行う。展覧会や公演をはじめ、映画上映やワークショップなどの多様なプログラムを展開するとともに、作品制作で培われた知識や技術を生かし、子ども向けのメディアリテラシー教育など、市民や学校と連携した事業にも取り組む。



詳細はこちら（公式WEBサイト）



撮影：脇田友



パフォーマンス

ダンス

音楽

その他

日本

ドイツ

あいたら えィ（新井英夫×板坂記代子×山田衛子）

『さん まるだが だんころ 3 ～音と動きのパフォーマンス～』

この世界の〈かすかさ〉へ扉をひらく

「小さく弱くゆっくり」な呼吸から生まれるコレクティブ最新作



©aitara-ei

日程：2026年10月9日（金）・12日（月・祝）

会場：東京芸術劇場 シアターイースト

開演	10.9 Fri	10.12 Mon
15:00		●
19:00	●	



発案／実験／実演：新井英夫、板坂記代子、山田衛子

ALSは筋力は失われても感覚は残る病。出力は強められないが、入力を強めることはできる——自身についてそう語るのは、ダンスアーティストで「体奏家」の新井英夫。身体・造形の表現家である板坂記代子、即興演奏家の山田衛子とともに3人が舞台に身を置き、「小さく弱くゆっくり」とした呼吸・動き・音で交感し、共振しはじめる**とき、観客は空間に生じる微細な揺らぎや響き、気配へと感覚を研ぎ澄ませていく**。本作は、「秋の隕石」が彼らに委嘱した、**この世界の〈かすかさ〉を分かちあうパフォーマンス**作品である。

からだの力を抜き、重さに任せることで生まれる動きを基本とする野口体操から大きな影響を受けた新井は、板坂とともに、舞台活動や教育・障害福祉の現場でのワークショップを行ってきたが、2022年、全身の筋肉が徐々に衰える神経難病ALS（筋萎縮性側索硬化症）の診断を受ける。現在は板坂と「ダンスのような」身体介護を日々発明し、人工呼吸器を装着しながら活動が続けている。2003～04年、新井と山田のドイツでの共同制作パフォーマンスを経て、2024年より3人によるコラボレーションを始動した。

「あいたら えィ」は、メンバー全員の名前を組み合わせた言葉遊びで、そこには「閉ざされたトビラが開いたら、えい！と何かが新たに生まれる」という希望も込められる。

プロフィール

発案／実験／実演：新井英夫／Hideo Arai

体奏家・ダンスアーティスト(1966～)。力を抜く身体・野口体操から深い影響を受ける。投げ銭方式の野外劇で“マチを劇場化”する劇団「電気曲馬団」を主宰(1987～96)。のち独学でダンスへ、国内外での公演多数。赤ちゃんから高齢者までを対象にバリアフリーなワークショップ「ほぐす・つながる・つくる」を教育・福祉等の場で実施。公演との両輪としてきた。2022年に全身の筋肉が衰える難病ALS罹患が判明、今年1月に人工呼吸器装着の延命手術を受ける。「にもかかわらずオモシロク！」をモットーに活動を継続中。

発案／実験／実演：板坂記代子／Kiyoko Itasaka

身体と造形の表現家。幼少期、ノートの罫線と罫線の間に線を描く遊びを好む。人がたくさんいて賑やかなのに人と関わらなくていいお祭りが好き。ローラースケート、川泳ぎ、木登りが得意。銅版画（反転の世界、傷の世界、外部の世界、他力の世界）から、野口体操へ。自分は重さ。重さこそじぶん。新井英夫のワークショップに伴走。サイトスペシフィックダンス。カラダがそこにあり、世界と響きあう驚き。即興装束。目的のない縫い物が溜まっている。パートナーのケア。日々重さの教室でカラダまるごと修行中。

発案／実験／実演：山田衛子／Eiko Yamada

(旧)文部省派遣生として滞在した(西)ベルリンで出会った新しい音楽教育の理論と実践を探る中、必然的に自らの表現活動へと進む。即興演奏に根源的かつ創造的音楽表現の可能性を求め、リコーダーによるソロからラージ・アンサンブルまでの様々な編成で演奏する。芸術諸領域を越えての活動も多い。協働のエネルギーを創造の根本とするベルリンのグループ Ex Tempore の創立メンバーとして、1980年代半ばより、特徴的な場やモノに潜む音を探し出し、空間的状况をも音楽要素として考えるパフォーマンスを繰り返す。



詳細はこちら（公式WEBサイト）



Photo by Kiyoko Itasaka
(2023年8月撮影)



Photo by Deoa Raihi



Photo by
Stewart Morgan Hajdukiewicz

演劇

日本

ジュンコエモト『真夜中に寂しくなったときに観たい演劇』 via Tokyo Metropolitan Theatre

キャンプに煌めく、〈君〉のためのエンターテインメント
江本純子がレズビアンとして表象するソロパフォーマンス



作・演出・出演：江本純子
音楽：山中 透 美術：南 志保
共同演出：遠藤留奈

日程：2026年10月16日（金）～18日（日）
会場：東京芸術劇場 シアターイースト

開演	10.16 Fri	10.17 Sat	10.18 Sun
13:30		●	
14:30			●
19:00	●	★	

★＝DJパーティあり



〈君〉が渴望しているレズビアンの物語とは何か？——異性愛が前提とされる社会で作られてきたレズビアン像に抗い、悲劇や生きづらさに回収されることのないレズビアンの恋愛や生存、その美学を軸に展開する。この作品は、〈君〉というレズビアンの存在を忘れない。

江本は本作で、「レズビアン・ドラマトゥルギー」を提唱する。レズビアンの欲望を普遍化させることなく、当事者から当事者へと呼応する言葉やユーモアを劇世界に配置していく。レズビアンの観客にとっては共感が生まれやすく、レズビアンではない観客にとっては居心地の悪さを感じることがあるかもしれない。それは、マジョリティが主体となる共感構造を反転させるための試みである。……でも理屈よりももっと大事なものは、〈君〉の体感に、この劇が最高にパワフルなエンターテインメントだって残ること。

2000年代、熱狂的狂騒舞台と評された毛皮族で女性性や身体表象の規範を攪拌してきた江本純子。更新し続ける筋金入りのエンターテイナーとして、ライブ感あふれる祝祭性と笑いを放ち、エンターテインメントの極地を切り拓いていく。「秋の隕石2026東京」では、自らのアイデンティティを投じたソロパフォーマンスで、レズビアン表象、ひいては、劇場を介したマイノリティ表象のあり方を問いかける。

ダムタイプの活動で知られる山中透の音楽、知覚と情動を呼び起こす南志保の美術が、この作品のつらぬく圧倒的虚構をいっそう拡張する。2025年、20席限定の超小劇場空間で初演された本作が、より刺激的に、よりキャンプに煌めき、大都市の公共劇場を経由して〈君〉へと届こうとする。この〈演劇〉は、ここから〈君〉に“hello, gorgeous.”と呼びかける。

プロフィール

作・演出・出演：江本純子／Junko Emoto

劇作家・演出家・俳優。2000年に劇団「毛皮族」を旗揚げ。女性俳優たちの身体を通じて過剰な演劇美学を貫いた毛皮族時代を経て、多様な支援のもと、マーケットにからめとられない創作の場と方法を模索してきた。近作『セクシードライバー』（2022）、映画『愛の茶番』（2024）では、演劇と映画、観客と作り手のあいだに立ち現れる境界と、その揺らぎを扱った。初監督映画『過激派オペラ』（2016）では女性同士の恋愛や若さを描くなど、レズビアン表象はこれまでも当然のように作品の中に息づかせてきた。さらに、客体化されたレズビアン表象への抵抗を起点に、虚構の反復のなかで、レズビアンという性を生きる主体の更新と、その先にある可能性を探究する。



©Wakana Hikino

詳細はこちら（公式WEBサイト）



演劇

メキシコ

アナカルシス・ラモス／ポルノトラフィコ 『オカンとカネ』

メキシコに暮らす〈母親〉と、演劇で生活する息子が紡ぐ
ドキュメンタリー・シアター
力強い母が語り直す経済史に立ち上がる、新たな芸術とカネのかたち



©INBAL CITRU Gabriel Morales

日程：2026年10月16日（金）～18日（日）

会場：東京芸術劇場 シアターウエスト

開演	10.16 Fri	10.17 Sat	10.18 Sun
11:30			◎
15:30		●	
19:00	★		

◎＝見えない・見えにくいの方のための「音声ガイド・タッチツアー」を実施いたします。（要予約）

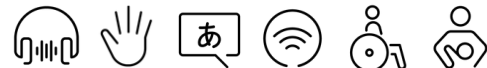
★＝終演後に約30分間のポスト・パフォーマンス・トークを予定しています。

クリエーション：ポルノトラフィコ

演出・空間デザイン：アナカルシス・ラモス

テキスト：アナカルシス・ラモス（ホセフィナ・オルライネタの語りに基づく）

出演：ホセフィナ・オルライネタ、アナカルシス・ラモス



メキシコの劇作家・演出家アナカルシス・ラモスとその母ホセフィナ。二人の地元ユカタン半島西部カンペチェは、スペイン植民地時代の要塞都市で、世界有数の石油資源を擁する地域として発展した。一方、過去数十年にわたりメキシコで**最も貧困層が多い州の1つ**でもある。この町でホセフィナは1960年より60年間、理髪師・チョリソ売り・ビデオブロガーなど**40以上のありとあらゆる仕事**を生活のために次々とこなしてきた。一方息子アナカルシスは、演劇活動に専念するため、また、カンペチェに蔓延する暴力や抑圧から逃れるため、そしてゲイの男性としてのアイデンティティと向き合うためにメキシコ・シティに移る。カンペチェの社会経済の盛衰のなかで、貧困の蔓延や社会福祉制度の欠如、ラモス自身の創作活動の困難など、様々な要因により**家族は離れ離れになっていた**。本作は、**この母と息子が舞台上で、カンペチェの経済史をたどりながら、家族とそれを取り巻く経済や社会の発展・その挫折を描くドキュメンタリー・シアター**である。母は物売りのテクニックや生き延びる策をときにユーモラスに語り、息子は母に質問しながら、現実の暮らしの厳しさや階級社会、演劇についての対話を展開する。**演劇の創作を通して家族が再生し、新たな関係を結びなおすそのプロセス**が観客にさらけ出される。**社会批評と個人史を、ドキュメンタリーと演劇という手法を交えて編み上げるアナカルシスの手腕**に加え、社会の大きな力に翻弄されながらも、そのカリスマ性で演劇に、さらには世界の舞台芸術界に大胆に挑戦し、**自らの経済史を語り直すことで新たな意味を与える、ホセフィナ自身の力強さ**にも触れてほしい。

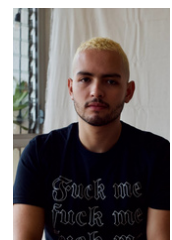
プロフィール

演出・空間デザイン：アナカルシス・ラモス／Anacarsis Ramos

劇作家、舞台美術家、演出家、俳優。演劇学と社会学を修め、現在はカンパニー「ポルノトラフィコ」のメンバー。社会的現実と、メディアにおけるその表象との関係性を探求し、とりわけ国家、民間、地域コミュニティといったさまざまな文脈においてフィクションがどのように利用されているかに関心を寄せる。叙情性、ユーモア、パロディを交えた彼の作品は、現実がいかに物語として構築されているかを浮き彫りにし、その表象に潜むバイアスを暴き出していく。舞台作品の創作に加え、さまざまな教育的な取り組みや舞台芸術に関するリサーチのコーディネートも手掛けている。ブログ「Mataclase」では、演劇に関する執筆活動も行う。



詳細はこちら（公式WEBサイト）



©Nicté del Carmen

演劇

日本

ダダルズ

野外公演『よだれ観覧車』

池袋西口に落下する、〈強烈な異物〉としての一人の言葉
夕暮れの雑踏へ放たれる関西弁が、既存の価値観を鋭く揺さぶる



日程：2026年10月17日（土）～18日（日）

会場：GLOBAL RING THEATRE

〈池袋西口公園野外劇場〉

開演	10.17 Sat	10.18 Sun
16:20	●	○

○＝聞こえない・聞こえにくいの方のための「バリアフリー日本語字幕（ポータブル字幕）」を実施いたします。（要予約）



作・演出・出演：大石恵美

池袋西口公園でそれほど親しくない人と待ち合わせをしている自分が、自分の感情を追いかけて回すストーカーに思えてくる。そして自分の尻尾を追いかける犬に思えてくる（『犬』）。買い物袋の持ち手が食い込んだ腕の赤みがオシャレだと、道で話しかけられる（『赤』）。わたしは子猿のように眠る、と思いながら昼寝することで、子猫たちにかわいさで勝ってしまったために陰口を叩かれる（『蟬』）。これらの導入からは想像もつかない場所へそれぞれ飛躍していく3作からなる、ダダルズ『よだれ観覧車』を、**GLOBAL RING THEATRE 〈池袋西口公園野外劇場〉にて上演**する。

ダダルズは2018年に大石恵美により旗揚げ。近年は「作者自身が自分の名前を名乗り、語り手として語る」形式で作・演出・出演を大石ひとりで担う作品を継続して発表している。小道具もない素舞台で大石が放つ、**もつれるようなグルーブをもった関西弁の語り**に付いていくうちに、観客は大石の奇想に巻き込まれている。だがその言葉が描く劇世界は、不条理さでもってこの不条理な現実に対峙している。本作で大石は、**他者の視線や既存の価値観に晒されながら生きる感覚に対する言葉や語りを探し、かつ単一の問題に回収されないように敢えて散らかす。**

2026年2月に**本作は第70回岸田國土戯曲賞を受賞**、その名を広く知られることとなった。

「秋の隕石」アーティストック・ディレクターの岡田利規が「**観客の安全圏が侵される感覚をもたらす**」と評する**超高強度の上演**が、日没の中、池袋西口の街を行き交う人々の視線を集めるだろう。

プロフィール

作・演出・出演：大石恵美／Emi Oishi

大阪府出身。ダダルズ主宰。2018年にダダルズを旗揚げ。2022年まで会話劇を創作していた。2023年から現在まで作・演出・出演を大石恵美が兼ねるひとりでの作品を継続して発表。2026年に『よだれ観覧車』が第70回岸田國土戯曲賞受賞。



Photo by Kai Takaha

チケット一般発売：2026年9月5日（土）10:00～

詳細はこちら（公式WEBサイト）



演劇

ダンス

オブジェクトシアター

コートジボワール

フランス

ナディア・ブグレ

『バーニング・ガールズ』

旧態依然な男社会なんてクソくらえ！

西アフリカの燃える女子が、パン生地と抵抗のダンスを引っ提げて池袋に襲来🔥



©Anne Volery

日程：2026年10月23日（金）～25日（日）

会場：東京芸術劇場 シアターイースト

開演	10.23 Fri	10.24 Sat	10.25 Sun
12:00			◎
15:00		★	
19:00	●		

◎＝見えない・見えにくい方のための「音声ガイド・タッチツアー」を実施いたします。（要予約）

★＝終演後に約30分間のポスト・パフォーマンス・トークを予定しています。

アーティスティック・ディレクション：ナディア・ブグレ

出演：アヌラ・アヤ・ラリサ・ラバレ、クリステル・エウエ



ナディア・ブグレはコートジボワール出身の振付家。**社会と身体・ジェンダーの境界を問い直す挑戦的な作品**を創作してきた。

ナディア自身の故郷であり、「象牙の奇跡」とも呼ばれる高度経済成長を遂げた都市アビジャンは、アフリカの有数の経済都市である。その都市が抱える貧困地域アボボで生活するアヤとクリステルによる、**様々に形を変えるパン生地を用いたパフォーマンス作品**。彼女たちの**実生活を元に**、今なお地域に、そして世界中に存在する**男性中心主義や、女性の身体に課せられた規範をはじめとする社会の抑圧**に対し、力強くそして明るく、燃えるように**毅然と抵抗**する。

アボボでいまを生きるバーニング・ガールズが、**ギャング文化や男性的肉体の誇示と固く結びついてきたダンスを、オブジェクトと彼女たち自身の身体**をもって清々しくキメる。その姿を、日本で抵抗を胸に日々を生きるガールズへ贈る。

昨年に引き続き、「秋の隕石」が紹介するオブジェクトシアターの1つ。

プロフィール

アーティスティック・ディレクション：ナディア・ブグレ／Nadia Beugré

コートジボワール出身の振付家・ダンサー。1995年にアビジャンの「Dante Theatre」でキャリアを開始し、1997年にはベアトリス・コンベ（Béatrice Kombé）と共に女性のみのダンスカンパニー「TchéTché」設立に参加。その後、セネガルの「École des Sables」、フランス・モンペリエの振付者養成プログラム「Ex.e.r.ce.」等で研鑽を積み、2012年にソロ作品『Quartiers Libres』を発表。以降、集団作品として『Legacy』（2015年）、『Tapis Rouge』（2017年）、『Roukasskass Club』（2019年）、『L'Homme rare』（2020年）などを国内外のフェスティバルで発表。2023年にはSACD新人振付家賞を受賞。彼女の作品は、伝統舞踊、実験的身体、都市／ストリート文化を融合し、ジェンダー・アイデンティティ・社会周縁のテーマを探索しており、国際的に高く評価されている。



©Bea Borgers

詳細はこちら（公式WEBサイト）



ダンス

音楽

その他

日本

虹組ファイツ

『第11回 虹組学園 秋の大文化祭』

誰かみたいになりたかった憧れを胸に、17年。
正直な〈好き〉を突き詰めた、不器用だけど全力なゲイアイドルパフォーマンス



日程：2026年10月25日（日）13:30

会場：東京芸術劇場 シアターウエスト

※13:00より会場外にて開演前パフォーマンスを予定



※一部舞台上字幕あり

※その他鑑賞サポートはwebでご確認ください

出演：虹組ファイツ、虹組ファイツOB

「アイドルごっこ」をコンセプトに結成されたゲイアイドルサークル・虹組ファイツは、2009年の結成以来、17年にわたりメンバーを緩やかに入れ替えながら活動が続け、これまで通算140名が参加してきた。関東・名古屋・関西・九州の4拠点をベースに、イベントごとにメンバーが集結するライブ出演をはじめ、音源・映像配信やレインボーパレードへの参加など、多彩な活動を展開している。

ライブで披露されるオリジナル楽曲は、恋愛や応援といったアイドルソングの王道的なテーマを扱いながら、同性同士の関係性を織り込み、これまで異性愛中心に形づくられてきたアイドル表現の幅をひらいていく。アイドルの歌とダンス、仲間との活動、ステージを思い思いに全力で楽しむメンバーのパフォーマンスからは、「誰だって自分の〈好き〉に正直になっていい」そんな気持ちが感じられる。彼らを見つめるうちに、観客のなかの〈アイドル〉や〈憧れ〉に対する固定観念もまた揺さぶられ、ひらかれていく。

過去10回にわたり開催されてきた『虹組学園 秋の大文化祭』では、歌やダンスにとどまらないさまざまな出し物が展開される。メンバーそれぞれの個性が立ち上がるこの場では、観客もまた、ただ眺めるだけではなく、その時間や熱量をともに楽しむ存在として迎え入れられていくはずだ。

プロフィール

出演：虹組ファイツ／NIJIGUMI FIGHTS

『アイドルごっこ』をコンセプトに、2009年2月に結成したゲイアイドルサークル。今年で結成16年、活動17年目を迎えます。

これまでに通算140名のメンバーが参加し、オリジナル楽曲のレコーディングやライブ活動を展開。関東・名古屋・関西・九州の4地区を拠点に、個性豊かなメンバーたちが各地のイベントに出演しながら、元気に楽しく活動を続けています。



詳細はこちら（公式WEBサイト）



演劇

音楽

日本

岡田利規 & 山田和樹 東京芸術劇場芸術監督 コラボレーション企画

『静寂のガツンとした一撃』

東京芸術劇場芸術監督ふたりによる初コラボレーション企画
劇場のアトリウムを舞台に〈小さい音〉と〈沈黙〉について問う



日程：2026年10月25日（日）17:00

会場：東京芸術劇場 アトリウム



作：岡田利規

指揮：山田和樹

演出・構成：岡田利規／山田和樹

2026年度より東京芸術劇場の新芸術監督に就任した岡田利規（舞台芸術部門）と山田和樹（音楽部門）による、劇場の地下1階から5階までの大きな吹き抜けを大胆に使った**一度きりの無料パフォーマンス作品**。初めてのコラボレーションにあたり、ジャンルの異なるふたりは往復書簡を重ね、その対話のなかから「**公共空間における小さな音・沈黙**」というテーマへとたどり着いた。このテーマに基づきながら、**岡田により書かれたテキストの朗読と、山田の指揮による音楽によって、アトリウムに新たな聴覚体験を立ち上げる**。劇場の開かれたスペースを舞台に、その新たな可能性を探る、実験的かつ詩的なパフォーマンス。

プロフィール

東京芸術劇場 舞台芸術部門芸術監督：岡田利規／Toshiki Okada

演劇作家、小説家、演劇カンパニー「チェルフィッチュ」主宰。2005年『三月の5日間』で第49回岸田國士戯曲賞受賞。同作での2007年クンステル・フェスティバル・デザール参加以降、国内外の90都市以上で新作を旺盛に上演し続けている。2016年以降ドイツ語圏公立劇場のレパートリー作品の作・演出も務め、2020年『掃除機』及び2022年『ドーナ（ツ）ツ』でベルリン演劇祭に選出。小説家としては、2007年『わたしたちに許された特別な時間の終わり』、2022年『ブロッコリー・レボリューション』を刊行。2025年度より舞台芸術祭「秋の隕石」アーティストック・ディレクター、2026年度より東京芸術劇場 舞台芸術部門芸術監督を務める。



©Kikuko Usuyama

東京芸術劇場 音楽部門芸術監督：山田和樹／Kazuki Yamada

指揮者。2009年ブザンソン国際指揮者コンクールで優勝。ほどなくBBC交響楽団を指揮して欧州デビュー。2012年～2018年スイス・ロマン管弦楽団首席客演指揮者、2016年9月～2026年8月モンテカルロ・フィルハーモニー管弦楽団芸術監督兼音楽監督、2023年4月からバーミンガム市交響楽団首席指揮者兼アーティストックアドバイザーを務め、翌年5月には同団音楽監督に就任。2026/2027シーズンより、ベルリン・ドイツ交響楽団首席指揮者兼芸術監督にも就任予定。日本では、主要オーケストラへの客演のほか、横浜シンフォニエッタ音楽監督、東京混声合唱団音楽監督兼理事長としても活動を展開。2026年度より東京芸術劇場 音楽部門芸術監督を務める。



©Zuzanna Specjal

詳細はこちら（公式WEBサイト）



パフォーマンス

メディアアート

日本

花形 槇

『エルゴノミクス胚』

秋の隕石がフックアップする新星・花形槇のパフォーマンス最新作
「椅子になる」ことを欲し、技術と人間の汽水域を探求する



Photo by Keita Otsuka

日程：2026年10月29日（木）～11月1日（日）

会場：東京芸術劇場 シアターイースト

開演	10.29 Thu	10.30 Fri	10.31 Sat	11.1 Sun
14:30			●	●
18:30	●	●		



コンセプト・実践：花形 槇

パフォーマンスやメディアアートの領域で活動するアーティスト・花形槇は、機器や環境を人間の身体にとって最適な形へと設計する思想であるエルゴノミクスに着目する。しかし花形が試みるのは、むしろその構造を反転させ、人間が「技術に対して発生する」事態を引き起こすことである。本作は、人間の振る舞いを規定する〈技術〉の典型例としての〈椅子〉に着目し、人間と技術の未分化な存在である〈胚〉を提示するため、「椅子になろうとする」パフォーマンス作品である。

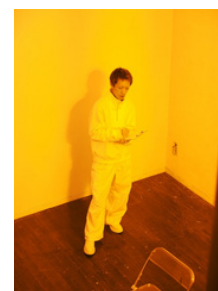
花形自身を含む実践者たちはヘッドマウントディスプレイを装着し、自身の身体がAIによってリアルタイムで椅子らしき図像へと変換され続ける映像を見つめながら、ゆっくりと微細に姿勢を変え、椅子へと〈変態（メタモρφォシス）〉しようとする。その動きはどこか奇妙で、〈変態〉的ですがあるが、社会や技術に要請され、「正常」なる人間で居続けることへの深い閉塞感から、「もう人間ではいられない」という花形の切実な欲望が、観る者をとらえてしまう。

本作は、舞台芸術祭「秋の隕石2025東京」において「隕石（＝企画のこと）募集」に採択され、『エルゴノミクス胚・プロトセル』と題した公開実験を経て発展を遂げてきた。本公演となる今回は、AIやモーションキャプチャなど新たなデジタル技術の導入、「凝視させる装置」としての劇場空間へのインストール、観客の身体感覚のさらなる揺さぶりなど、前回上演を踏まえての挑戦的なアップデートが施される。テクノロジーが想像力を拡張する——その過程を、見届けてほしい。

プロフィール

コンセプト・実践：花形 槇／Shin Hanagata

1995年東京都生まれ。パフォーマンス、メディアアート、現代美術などの領域で活動。テクノロジーに加速する資本主義社会において「私」であること、「人間」であることが揺らぐリアリティのもと、通信システム、ウェアラブルデバイス、義肢装具といった身体と世界とを関係づけるテクノロジーに着目し、現代における〈人間性の捻転〉を試みる。



©Takuto Ohta

詳細はこちら（公式WEBサイト）



インスタレーション

メディアアート

日本

山城知佳子『リコーリング(ス)ーシアトリカル・バージョン』

沖縄・東京・パラオ。

3つの〈土地〉と〈個人〉に刻まれた、戦争の記憶と風景のポリフォニー
2025年話題の美術展が、那覇を経由し東京の劇場空間に立ち上がる



Photo by Hideaki Higa ©Chikako Yamashiro
那覇文化芸術劇場なはーと公演記録

日程：2026年10月30日（金）～11月3日（火・祝）
会場：東京芸術劇場 プレイハウス

開演	10.30 Fri	10.31 Sat	11.1 Sun	11.2 Mon	11.3 Tue
11:00		●	●	●	
13:00					●
17:30	●	●	●	●	

*途中入退場自由

*映像には日本語、英語字幕があります。



ディレクター [映像・構成・演出]：山城知佳子

空間に散りばめられたスクリーンから重なり響く、証言、再現、演奏、漫才などさまざまな声や身振り。それらに取り囲まれた観客は、第二次世界大戦が、ひとつの過ぎ去った出来事ではないことを身体的に体感していく。

那覇出身の映像作家・山城知佳子は、写真やビデオ、パフォーマンスを駆使し、沖縄の歴史や政治、文化を視覚的に探求してきた。米軍基地敷地内の黙認耕作地を舞台のひとつとする『肉屋の女』（2012）や、戦争体験を語る老人の映像を山城自身の顔に映写し、その声を自身の身体を通して響かせようと試みる『あなたの声は私の喉を通った』（2009）の鮮烈なイメージは話題をさらった。今作は、**これまでの山城作品に通底する関心や実践とも深く響き合っている。**

植民地化や激しい地上戦を経験した沖縄は、現在に至るまで複雑な政治的・社会的状況を抱え続けている。本作は、**その歴史の層を、異なる語りや身体、さらには語られない〈沈黙〉までも含めて並置し提示**する。2023年から2025年にかけて撮影された映像には、沖縄戦後史の記憶をその身に刻む平良修牧師、ジャズシンガー齋藤梯子、ミュージシャン喜納昌吉、東京大空襲証言者の亀谷敏子、そして山城の父である小説家・山城達雄が、沖縄移民の子として戦前・戦中を過ごした南洋パラオの風景とともに映し出される。

内容と形式の両面で歴史と記憶の多層性を表現し、比類なき強度を獲得している本作は、2025年にアーティゾン美術館でインスタレーションとして発表された。その後、戦後80年特別企画として那覇文化芸術劇場なはーとで劇場空間にあわせ再構成され、今回の「秋の隕石2026東京」では、さらに**東京芸術劇場に応答**するかたちで構成を更新する。本バージョンでは**観客は移動しながら本作を鑑賞**する。上演が進むに従って観客の立場や感覚は変化する、劇場空間の中には、複数の記憶や声、身体が重なり合う経験が立ち現れる。

プロフィール

ディレクター [映像・構成・演出]：山城知佳子／Chikako Yamashiro

映像作家。アーティスト。1976年、沖縄県生まれ。

写真、ビデオ、パフォーマンスを駆使し、沖縄の歴史、政治、文化を視覚的に探求する。近年は、沖縄の問題をそこに留まらない普遍的な命題として捉え、東アジア地域の俯瞰された歴史や人々を題材に、アイデンティティ、生と死の境界、他者の記憶や経験の継承をテーマに制作・思考を続けている。近年の主な個展に、「リコーリング(ス)ーシアトリカル・バージョン 2025」（那覇文化芸術劇場なはーと、2025-26年）、「Song of the Land」（グルベンキアン・モダンアートセンター、リスボン、ポルトガル、2024-25年）、「ペラウの花」（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、香川、2023年）、「リフレーミング」（東京都写真美術館、2021年）、「Chinbin Western」（ダンディー・コンテンポラリー・アーツ、ダンディー、イギリス、2021年）など。また、Museum of Modern Art (MoMA) の上映プログラム「Modern Mondays」での作品上映およびアーティスト・トークを行ったほか、「ジャム・セッション 石橋財団コレクション×山城知佳子×志賀理江子 漂着」（アーティゾン美術館、2025-26年）をはじめ、国内外の美術館・国際展において作品を発表している。



Photo by
Ryudai Takano

詳細はこちら（公式WEBサイト）



演劇

メディアアート

オブジェクトシアター

ロシア

アヒェ・エンジニアリング・シアター

『白い部屋』

オブジェクトシアターのレジェンドによる30年来の代表作
今もなお輝く、詩的でアヴァンギャルドな寓話の宝石箱



©internationales figuren.theater.festival / Photo: Erich Malter

日程：2026年10月31日（土）～11月2日（月）

会場：東京芸術劇場 シアターウエスト

開演	10.31 Sat	11.1 Sun	11.2 Mon
16:00			◎
18:00	●	●	

◎＝見えない・見えにくい方のための「音声ガイド」を実施いたします。（要予約）



出演：マクシム・イサエフ、パヴェル・セムチェンコ、バーバラ・ザイファート

現在活躍するオブジェクトシアターのアーティストの多くが影響を受けたと語る、ロシアで1989年に設立されたパフォーマンス集団アヒェ。オブジェクトシアター界の〈巨匠〉による30年来の代表作が登場する。水や火、紙や布といったシンプルなオブジェクトを用い、強烈なイメージの羅列と、舞台効果によるポエティックで寓話的かつユニークな演出で観客の感覚と想像力を刺激する。

ヨーロッパへ拠点を移し、今なお精力的に活動が続けているアヒェ。既存の演劇形式に囚われることなく、「彫刻的かつ詩的」な演劇言語を駆使して秩序への挑戦が続けている。社会に対し芸術ができることを身を賭して体現している彼らの生き様を東京で目撃してほしい。

1996年初演以来、アヒェのメンバーと共に月日を重ねながら世界各地で上演されてきた本作は、『白い部屋』に紡ぎ出される鮮やかな情景の連鎖と、その軽妙洒脱でユーモアある時空間を、2026年の東京にもなお変わることなくもたらすだろう。

プロフィール

アヒェ・エンジニアリング・シアター／AKHE ENGINEERING THEATRE

1989年にロシア・サンクトペテルブルクで設立された演劇集団。創設者はマクシム・イサエフ、パヴェル・セムチェンコ、ヴァディム・ヴァシリエフの3名であり、既存の演劇形式にとらわれず、映像・美術・パフォーマンスを横断する創作を目的として発足した。当初は都市空間を舞台とするハブニング的活動を展開したが、1996年頃より舞台芸術を主領域とする制作体制に移行し、物体や光・音・空間を俳優と同等の演劇要素とみなす「工学的演劇（Engineering Theatre）」の手法を確立した。現在も創設者のイサエフとセムチェンコを中心に活動を継続し、演劇を物理的・詩的実験として捉える独自の芸術理念を貫いている。



詳細はこちら（公式WEBサイト）



上演じゃないプログラム

アヒェ ワークショップ

「よく調律された間違いのためのインストラクション」

オブジェクトによる詩はいかに作られるか。

日本のオブジェクトシアター・シーンを、ここからみんなで切り拓こう。

日程：2026年10月21日（水）～10月25日（日）

会場：東京芸術劇場 ギャラリー1

詳細はこちら（公式WEBサイト）



演劇

オブジェクトシアター



提供素材一覧

※本ページに掲載のあるものは一部です。全データは[こちらより](#)ダウンロードいただけます。

1. 振子びじん+YCAM 『せいせいのせんせい』 撮影：守屋友樹／写真提供：山口情報芸術センター [YCAM]



2. あいたら エイ (新井英夫×板坂記代子×山田衛子) 『さん まるだが だんころ 3 ～音と動きのパフォーマンス～』



1枚目 | ©aitara-ei
2-3枚目 | ©aitara_ei / 糞屋

3. シアター能楽 英語能 『青い月のメンフィス』 2-3枚目 | 撮影：デビッド・サタースキー



4. ジュンコエモト 『真夜中に寂しくなったときに観たい演劇』 撮影：曳野若菜



5. アナカルシス・ラモス／ポルノトラフィコ 『オカンとカネ』



1-2枚目 | ©Nicole Medina Ramírez

3枚目 | ©INBAL CITRU Gabriel Morales

6. クリストファー・リュウピング 『渴望』 サラ・ケイン作

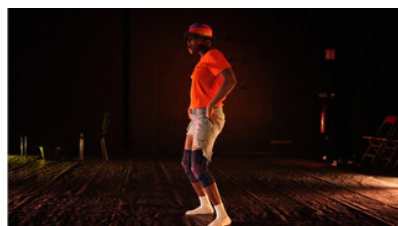


1枚目 | ©Orpheas Emirzas 2-3枚目 | ©Thomas Aurin

7. ダダルズ 野外公演『よだれ観覧車』



8. ナディア・ブグレ『バーニング・ガールズ』



1枚目 | ©Noorullah_Azizi
2枚目 | ©Anne Volery
3枚目 | ©Noorullah_Azizi

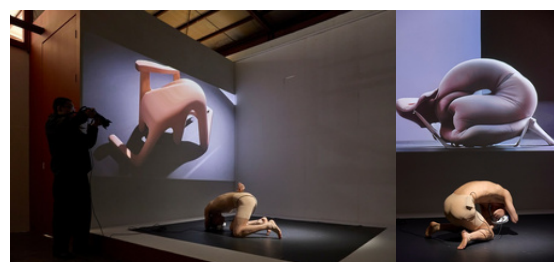
9. 虹組ファイツ『第11回 虹組学園 秋の大文化祭』



10. 岡田利規&山田和樹 東京芸術劇場芸術監督
コラボレーション企画『静寂のガツンとした一撃』



11. 花形 槇『エルゴノミクス胚』 Photo by Keita Otsuka



12. 山城知佳子『リコーリング(ス)ー シアトリカル・バージョン』

Photo by Hideaki Higa ©Chikako Yamashiro 那覇文化芸術劇場なはーと公演記録



13. アヒエ・エンジニアリング・シアター『白い部屋』

©internationales figuren.theater.festival / Photo: Erich Malter

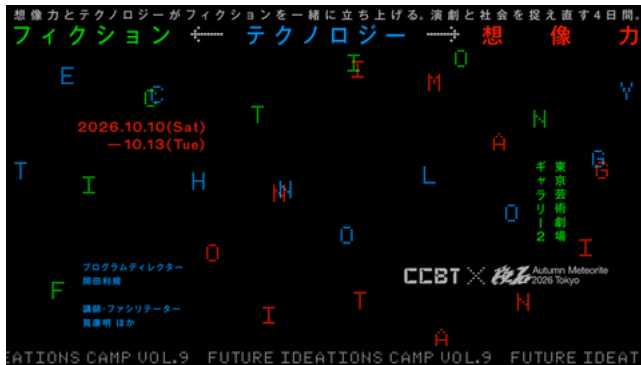


演劇

メディアアート

シビック・クリエイティブ・ベース東京 [CCBT] × 舞台芸術祭「秋の隕石」 Future Ideations Camp Vol.9 : フィクション←テクノロジー→想像力

想像力とテクノロジーがフィクションと一緒に立ち上げる。
演劇と社会を捉え直す4日間。



日程：

キャンプ

2026年10月10日（土）～10月13日（火）

成果展示（一般公開）

2026年10月15日（木）～10月18日（日）

各日13:00～19:00（最終日は17:00まで）

会場：東京芸術劇場 ギャラリー2

プログラムディレクター：岡田利規

講師：寛康明

ファシリテーター：宇佐美奈緒、今野恵菜、佐藤朋子、永松歩 ほか

アートとデジタルテクノロジーを通じて人々の創造性を社会に発揮するための活動拠点、シビック・クリエイティブ・ベース東京 [CCBT] と、舞台芸術祭「秋の隕石」の共催で実施する短期集中型ワークショップ。CCBTのコアプログラム「キャンプ」としては第9回、「秋の隕石」とのコラボレーションとしては第2回となる今回は、『**秋の隕石**』アーティスト・ディレクターの岡田利規が**プログラムディレクター**を務め、多様な専門性を持つ講師・ファシリテーターとともにカリキュラムを構成。**テクノロジーを、演劇が持つ〈観客の想像力を通じてフィクションを成立させる力〉を増幅するものとして活用**することで、**社会と現実に新たな視点をもたらす演劇の可能性を探る4日間**。一般公募で選出される約20名の参加者が、レクチャー、ワークショップ、グループワークを経て、その思考や成果を展示形式で発表する。

プロフィール

プログラムディレクター：岡田利規 / Toshiki Okada

プロフィールはp.7をご参照ください。

講師：寛康明 / Yasuaki Kakehi

研究者、アーティスト / 東京大学大学院教授。

1979年京都生まれ。インタラクティブ・メディア研究者 / アーティスト。慶應義塾大学、MITなどでの活動を経て、2018年より東京大学大学院情報学環にて研究・制作・教育に従事。博士（学際情報学）。物理素材や現象とデジタル技術を掛け合わせ、モノや身体、空間を介した体験を拡張するインタラクティブ・メディアを開発する。エンジニアリング / アート / デザインの分野をまたがって活動を展開し、瀬戸内国際芸術祭2025、Ars Electronica Festival、YCAM、ICCなどでの展示や、STARTS PRIZE 2022 Honorable Mention、第23回文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞、ACM CHI2017 Best Paper Award、平成26年度科学技術分野の文部科学大臣表彰若手科学者賞など受賞も多数。



シビック・クリエイティブ・ベース東京 [CCBT]

アートとデジタルテクノロジーを通じて、人々の創造性を社会に発揮する（シビック・クリエイティブ）ための活動拠点。創作スペース、スタジオ等を備え、様々なプログラムを通じて、クリエイティブ×テクノロジーで東京をより良い都市に変える原動力となることを目指す。

<https://ccbt.rekibun.or.jp>

**CIVIC
CREATIVE
BASE
TOKYO**
シビック・クリエイティブ・ベース東京

詳細はこちら（公式WEBサイト）



次はどこ？みて、はなすレジデンスー

世界の舞台芸術の創作に関わる若手を招聘する、
未来に向けた発見と交流のためのプログラム



日程：2026年10月22日（木）～11月2日（月）

メンター：ネス・ロケ

助成：独立行政法人国際交流基金



アジアを中心に、世界各地で舞台芸術の創作に携わる若手を「秋の隕石」に招聘し、作品の鑑賞とそれらに対する感想や解釈を語り合うことを通して相互理解を深める滞在型プログラム。メンターやアーティストも交えたディスカッションを通して新たな視点を得るほか、国内外の舞台芸術関係者との交流、滞在中に得た気づきや思考を共有する機会も設ける。メンバーたちが普段の活動領域から一歩外に出て、同時代の実践者と率直な意見交換を行い刺激し合うことで、いずれ協働できるような継続的なネットワークへと発展していくことを期待する。同時に「秋の隕石」にとっても次世代の問題意識や視点に触れ、今後のフェスティバルのあり方を検討する契機とする。

プロフィール

メンター：ネス・ロケ／Ness Roque

1991年、フィリピン・アンヘレス市生まれ。俳優、ドラマトウルク、教育者。文部科学省奨学金を受け、東京藝術大学大学院美術研究科グローバルアートプラクティス専攻で修士号を取得。芸術・リサーチ・コミュニティエンゲージメントを横断する学際的コレクティブ「Salikhain Kolektib」（GUDSKUL Collective Studies, 2022）メンバー。近年は、チェルフィッチュ『宇宙船イン・ビトゥーン号の窓』（2023-2024）海外ツアーに出演。ドラマトウルクとしては、フィリピン教育演劇協会（PETA）と京都を拠点とする劇団BRDGの共同制作『Sari-Sali: Portal Cafe』（マニラ、2024）に参加した。ラヤ・マーティン監督の映画『Now Showing』（カンヌ2008）、『How to Disappear Completely』（ロカルノ2013、MoMA2017）では主演を務めた。 www.nessroque.com



©Nanami Maeda

詳細はこちら（公式WEBサイト）



海外プレゼンター招聘

世界の劇場やフェスティバルとのネットワークを更新するための
交流・意見交換プログラム



Photo by Azusa Yamaguchi

日程：2026年10月24日（土）～11月2日（月）

助成：独立行政法人国際交流基金



世界各地のアーティスト、フェスティバルや劇場と接続しネットワークを更新・拡大するために、**作品制作や企画、国際共同製作などを担うドラマトウルグやプレゼンター、キュレーター等を招聘**する。今後の活躍が期待される次世代の担い手を主な対象とし、「秋の隕石」の視察と交流の機会を設け、持続的かつ双方向の関係を築き、将来の協働を目指す。国際舞台芸術祭に精通するジャーナリストや批評家も招くことで外部からの視点を取り入れ、「秋の隕石」からの国際的な発信と世界からのフィードバックの循環を促す。

詳細はこちら（公式WEBサイト）



ウェルカム体制（＝来場サポートのこと）

わたしたちはこの秋、劇場でみなさんをお待ちします。お迎えするために必要な、あらゆることをします。さまざまな人が上演し、さまざまな人が立ち会うこと。それも隕石が引き起こしたい変動です。

音や光の刺激に敏感な方、小さなお子さまなどにも安心して観劇を楽しんでいただけるような上演もあります。

わからないことがあったら、お問合せフォームや電話で質問してください。



[詳細はこちら（WEBサイト）](#)



アクセシビリティ設備＆サービス

アクセシビリティ・デスク

1Fのボックスオフィス(総合案内)の横にアクセシビリティ・デスクがございます。見えない・見えにくい方や聞こえない・聞こえにくい方など、多様な方に鑑賞をお楽しみいただけるよう、鑑賞サポートやアクセシビリティ情報のご案内・各種備品のお貸出しをしております。

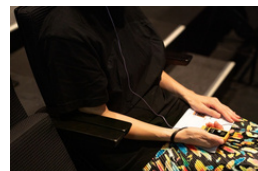


鑑賞サポート

見えない・見えにくい方へ



音声ガイド：開演前に客席で舞台装置の説明や登場人物について、上演中に俳優の動きや舞台セットの変化など、ナレーターがリアルタイムで解説します。解説をイヤホンでお聴きいただける機器を無料でお貸出しします。同伴される方にも機器をお貸しいたしますので、一緒にお楽しみください。（日本語対応のみ）



音声ガイド
Photo by Hajime Kato



タッチツアー：舞台上の演出で使用する素材などに触れ、より具体的なイメージをお伝えいたします。



タッチツアー

聞こえない・聞こえにくい方へ



バリアフリー日本語字幕（ポータブル字幕）：セリフや効果音などの音声情報が入った「バリアフリー日本語」をお手元でご覧いただけるポータブル字幕機をお貸しいたします。字幕は自動的に切り替わります。ポータブル字幕機は、周りから画面が暗く見えるように遮光フィルムの加工をしておりますので、安心してご観劇いただけます。また、手で持たずに観劇できるよう、アームスタンドを設置しています。



バリアフリー日本語字幕
（ポータブル字幕）
Photo by Hajime Kato



日本語舞台上字幕：舞台上に日本語字幕が表示されます。



ヒアリングループ（磁気ループ）：舞台上の音声を効果的に伝える聴覚支援システムで、磁気コイル付補聴器や人工内耳を使用されている方にご利用いただけます。なお、Bluetooth補聴器には対応しておりませんので、予めご了承ください。ヒアリングループのカバーエリアは、各ホール座席表をご確認ください。



鑑賞に不安のある方へ



音や光の刺激に敏感な方やお子さまなど、みんなが安心して楽しめる上演プログラムです。



日本語舞台上字幕
舞台芸術祭「秋の隕石2025東京」
『ダンスの審査員のダンス』
Photo by Azusa Yamaguchi

見守りスタッフ

お困りごとをお伺いする見守りスタッフも配置しています。

多言語対応

上演プログラムには、日本語と英語の字幕等が付きます。演目によっては、それ以外の言語にも対応します。

車いすユーザーの方へ



各会場に車いすスペースがあります。
車椅子でご鑑賞をご希望をお客様は、ご案内できるスペースに限りがあるため、ご購入前に東京芸術劇場ボックスオフィスへお問い合わせください。Tel：0570-010-296



多言語対応（日英字舞台上字幕）
舞台芸術祭「秋の隕石2025東京」
Shakespeare's Wild Sisters Group × 庭劇団ベニノ
『誠實浴池 せいじつよくじょう』
Photo by Kozo Kaneda

ウェルカムぎんが

誰もが気ままに過ごせる場所が芸術のロワー広場に登場
さまざまな〈わたし〉と世界の境界が少しずつ変容する、交流スペース



©水内貴英

コンセプトデザイン：戸舘正史

会場デザイン：水内貴英

制作：一般社団法人あひるタイガ社



日程：

2026年10月9日（金）～11月3日（火・祝）

会場：

東京芸術劇場 ロワー広場 ほか



秋の隕石の期間中、『ウェルカムぎんが』は、誰もが立ち寄り、休み、気ままに過ごせる場所として現れます。そこは、こどものためだけでも、大人のためだけでもない場所です。あなたもわたしも、人間も、人間ではない何かも、スタッフも来場者も、さまざまな境界が少しずつ変容していく場所です。

ロワー広場を中心に、温泉のようにほっとできる居場所として出現しながら、時には場所を移し、時には姿を変え、生きもののように変化していきます。お茶を飲んだり、椅子に座って休んだり、誰かと話したり、何もせずぼんやりしたり。秋の隕石の情報に出会えたり、体調が悪くなったときに少し休めたりもします。

誰でも来られて、誰でもいられて、誰でもなくてもいられる場所。なんだかよくわからないけれど、すごく落ち着く。そんな、休憩と交流の自由なスペースです。

プロフィール

コンセプトデザイン：戸舘正史／Masafumi Todate

専門はアートマネジメント、文化政策。アーツ前橋、（一財）地域創造等を経て2023年度まで愛媛大学社会共創学部寄附講座助教及び松山ブンカ・ラボディレクター、2024年度まで港区みなの芸術センター研究機能専門参与を務める。市民主体による自治的な文化活動を展開するための制度設計や中間支援、ワークショップの企画やファシリテーションなどを手掛ける。港区文化芸術活動サポート事業調査員、四国学院大学、愛知大学、青山学院大学、各非常勤講師。社会福祉法人来島会アートプロジェクト監修。共著に『芸術と環境 劇場制度・国際交流・文化政策』（論創社）、『アートはいつ〈アート〉になるのか アート化とは何か』（水曜社）等。



会場デザイン：水内貴英／Takahide Mizuuchi

1979年岡山県生まれ。武蔵野美術大学中退。

作品が関わる場所や状況に応じて変わる、さまざまな手法・素材を用いた作品を国内外で発表している。

また、ワークショップによって起こる出来事や空間もまた作品であるという考えのもと、大規模なワークショップを数多く手がける。

主な展覧会に、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」（新潟県、2003年、2009年、2012年）、台三線芸術祭（台湾、2019年）など。

ほかに、芸術祭や公共施設、学校などでワークショップを多数実施。



詳細はこちら（公式WEBサイト）



こどもあそびシアター

子育て中の観劇をサポートします！
大人は自由にアートな休日、こどもはこちらでアートな体験



Photo by Hajime Kato

コンセプトデザイン：戸館正史
ツール・会場デザイン：YURIKO
制作：一般社団法人あひるタイガ社



日程：
2026年10月9日（金）～11月3日（火・祝）

会場：
東京芸術劇場 アトリエイースト ほか



大人が観劇をしているあいだ、こどもたちは「こどもあそびシアター」にあつまって、好きなことをして遊びます。

お人形を作る係、絵を描く係、お話を考える係、ポスターを作る係、飾りを作る係、歌う係、踊る係。ひとりひとりの「やってみたい！」をあつめて、その日だけのこどもあそびシアターをつくります。

毎年、「かえりたくない！」「もっとここで遊ぶ～！」という声がたくさん聞こえる、人気のプログラム。

プロフィール

コンセプトデザイン：戸館正史
プロフィールはp.30をご参照ください。

ツール・会場デザイン：YURIKO

株式会社ニューモア代表・コミュニケーションデザイナー。様々な地域で「多世代・多業種の協働」をテーマに住民参加型のデザイン・アートプロジェクトに取り組む。親子が同級生になるイベント「おやこ小学校」「かぞくアートクラブ」ほか、障害福祉×デザインのチーム「想造楽工」を主催している。



詳細はこちら（公式WEBサイト）



子どもが楽しめる公演



お子さまと一緒に楽しめる上演プログラムもあります。

※詳しくはウェルカム体制WEBページでご確認ください。

託児サービス



東京芸術劇場内の一時託児をご利用いただけます。

*生後3ヵ月～小学校入学前までのお子さま対象

*有料・定員制・要事前予約（公演日の1週間前まで）

*ご予約受付・お問合せ：株式会社明日香／電話：0120-165-115（平日9：00～17：00）

お申し込みフォーム：<https://ws.formzu.net/dist/S11738210/>

チケット情報

<チケット料金・取扱一覧>

No.	プログラム名	席種	料金 (税込)					取扱プレイガイド				
			一般	U29	U18	U15	障害者割引	東京芸術劇場 ボックス オフィス	チケット ぴあ	イープラス	ローソン チケット	Peatix
1	振子びじん+YCAM 『せいせいのせんせい』	自由席 (参加型)	¥5,000	—	—	¥2,500	¥4,500	●	●	—	—	—
2	あいたら えい (新井英夫×板板記代子×山田衛子) 『さんまるだが だんころ 3 〜音と動きのパフォーマンス〜』	自由席	¥4,000	¥2,500	¥1,000	—	¥3,600	●	●	●	●	● ※障害者 割引のみ
3	シアター能楽 英語版『青い月のメンフィス』	指定席	S席 ¥6,000	A席 ¥4,500	S席 ¥3,500	A席 ¥2,500	S・A席 ¥1,000	—	●	●	●	—
4	ジュンコエモト 『真夜中に寂しくなったときに観たい演劇』 via Tokyo Metropolitan Theatre	自由席	¥4,500	¥2,500	¥1,000	—	¥4,050	●	●	●	●	—
5	アナカルシス・ラモス/ボルノトラフィコ 『オカンとカネ』	自由席	¥5,000	¥3,000	¥1,000	—	¥4,500	●	●	●	●	—
6	クリストファー・リュベング 『渴望』サラ・ケイン作	指定席	S席 ¥6,000	A席 ¥4,500	S席 ¥3,500	A席 ¥2,500	S・A席 ¥1,000	—	●	●	●	—
7	ダダルス 野外公演『よだれ観覧車』	自由席	¥3,500	¥2,000	¥1,000	—	¥3,150	—	—	—	—	●
8	ナディア・ブグレ 『バーニング・ガールズ』	自由席	¥5,000	¥3,000	¥1,000	—	¥4,500	●	●	●	●	—
9	虹組ファイツ 『第11回 虹組学園 秋の大文化祭』	自由席	¥3,500	¥2,000	¥1,000	—	¥3,150	●	●	●	●	—
10	岡田利規&山田和樹 東京芸術劇場芸術監督 コラボレーション企画 『静寂のガッツンとした一撃』	—	無料・予約不要									
11	花形 楓 『エルゴノミクス胚』	自由席	¥4,500	¥2,500	¥1,000	—	¥4,050	●	●	●	●	—
12	山城知佳子 『リコーリング(ス)ーシアトリカル・バージョン』	自由席 (回遊型)	¥6,000	¥3,500	¥1,000	—	¥5,400	●	●	●	●	—
13	アビエ・エンジニアリング・シアター 『白い部屋』	自由席	¥5,000	¥3,000	¥1,000	—	¥4,500	●	●	●	●	—
14	シビック・クリエイティブ・ベース東京 [CCBT] × 舞 台芸術祭「秋の隅石」 Future Ideations Camp Vol.9: フィクション+テクノロ ジー+想像力 成果展示	—	無料・予約不要									
17	アビエ ワークショップ 『よく調律された間違いのためのインストラクション』	参加型 (5日間)	¥10,000	¥6,000	—	—	¥9,000	—	—	—	—	●
17	アビエ ワークショップ 『よく調律された間違いのためのインストラクション』 公開レクチャー	—	無料・予約不要									
17	アビエ ワークショップ 『よく調律された間違いのためのインストラクション』 成果発表	—	無料・要予約					—	—	—	—	●



<チケット発売日> ※一部演目を除く

一般発売：2026年8月8日（土）10:00～

芸劇メンバーズWEB先着先行：2026年8月1日（土）10:00～8月7日（金）23:59

※東京芸術劇場ボックスオフィスのみ取扱

※年齢割引・障害者割引は芸劇メンバーズWEB先着先行での取り扱いはありません。（『せいせいのせんせい』を除く）

<チケット取扱>

- ・東京芸術劇場ボックスオフィス
窓口（休館日を除く10:00～19:00）
電話 0570-010-296（休館日を除く10:00～19:00）
※国際電話および一部のIP電話・プリペイド式の携帯電話からはご利用いただけません。
WEB <https://www.geigeki.jp/t/>（24時間受付（メンテナンスの時間を除く））

- ・チケットぴあ WEB（<https://w.pia.jp/t/geigeki/>）／セブンイレブン店舗
- ・イープラス WEB（<https://eplus.jp/geigeki/>）／ファミリーマート店舗
- ・ローソンチケット WEB（<https://l-tike.com/>）／ローソン、ミニストップ店舗
- ・Peatix WEBのみ（<https://autumnmeteorite-2026.peatix.com>）

<注意事項>

- ・年齢割引チケットは東京芸術劇場ボックスオフィスにて前売のみ取扱いとなります（枚数限定・公演当日要証明書）。
- ・一般料金のチケットで年齢割引の対象者様が入場されても差額の返金はありません。また、年齢割引のチケットで一般の方がご入場される際は、公演当日に受付で差額のお支払をお願いいたします。
- ・障害者手帳・ミライIDをお持ちの方は、割引料金でご鑑賞いただけます。詳細は、ボックスオフィス、または公式WEBサイト（ウェルカム体制（＝来場サポートのこと））にてご確認ください（要事前申込）。
- ・車いすでご鑑賞を希望のお客様は、ご案内できるスペースに限りがあるため、ご購入前にボックスオフィス（0570-010-296）へお問合せください。
- ・全日程でヒアリングループ（磁気ループ）が客席の一部で作動します。（一部プログラムを除く）
- ・やむを得ぬ事情により、記載内容・公演情報等に変更が生じる場合がございます。
- ・営利目的でのチケットの予約・購入・転売は固くお断りします。
- ・公演中止の場合を除き、ご予約・ご購入いただきましたチケットのキャンセル・変更は承れません。
- ・ご来場前に必ず公式WEBサイト内の最新情報をご確認ください。

<お問合せ>

- ・チケットに関するお問合せ
東京芸術劇場ボックスオフィス 0570-010-296（休館日を除く10:00～19:00）

- ・鑑賞サポートに関するお問合せ
メール：accessibility@autumnmeteorite.jp
電話：03-6812-1663（土日祝及び東京芸術劇場休館日を除く11:00～17:00）

会場（アクセス）



東京芸術劇場

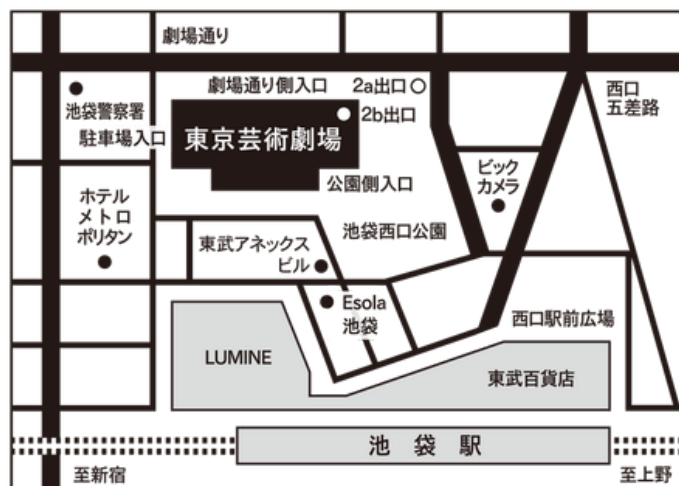
〒171-0021 東京都豊島区西池袋1-8-1

JR・東京メトロ・東武東上線・西武池袋線、池袋駅西口より徒歩2分。
駅地下通路2b出口直結。

GLOBAL RING THEATRE 〈池袋西口公園野外劇場〉

〒171-0021 東京都豊島区西池袋1-8-26

JR・東京メトロ・東武東上線・西武池袋線、池袋駅西口より徒歩2分。
駅地下通路2a出口より徒歩1分。



東京舞台芸術祭／舞台芸術祭「秋の隕石2026東京」

東京舞台芸術祭実行委員会

顧問：野村 萬（（公社）日本芸能実演家団体協議会会長、能楽師）

委員長：近藤誠一（元文化庁長官）

副委員長：古賀信行（東京芸術劇場 館長）

片岡容子（東京都生活文化局文化振興部長）

委員： 内野 儀（学習院大学教授）

崎田淳也（アサヒグループジャパン株式会社総務部 シニアマネージャー）

夏坂真澄（（公社）企業メセナ協議会 代表理事）

久野敦子（（公財）セゾン文化財団 理事長）

松井真司（（公財）東京都歴史文化財団 総務部長）

渡邊裕之（東京商工会議所豊島支部 会長）

山内真理（公認会計士山内真理事務所 代表）

舞台芸術祭「秋の隕石2026東京」アーティスティック・ディレクター：岡田利規

事務局 事務局長：鈴木順子

事務局次長：久保裕司（東京都）、丸岡ひろみ

事務局運営：松谷はるな、小林尚美

舞台芸術祭「秋の隕石2026東京」制作：武田侑子、寺田 凜、藤崎 悠、大塚侑子

舞台芸術祭「秋の隕石2026東京」アクセシビリティ：多田和代

PAB／Open Call Programs／都内演劇祭ネットワーク：藍原さほ子、福嶋芙美

広報：木下奈保子、金子晴菜

実務研修員：荒木萌里、橋本佑月

法務アドバイザー：福井健策、寺内康介、田島佑規（骨董通り法律事務所）

東京芸術劇場 館長：古賀信行

舞台芸術部門芸術監督：岡田利規

音楽部門芸術監督：山田和樹

副館長：鈴木順子

管理課長：清水伸吾

事業企画課長：矢作勝義

舞台管理担当課長：安田武司

制作担当課長：内藤美奈子

運営担当課長／コンサートホール・ジェネラルマネージャー：大貫 篤

芸術祭担当課長：丸岡ひろみ

舞台技術：石丸耕一、新島啓介、奥野さおり、井上武憲、渡邊武彦、松島千裕、安藤達朗、行方太一、澤口敬一

広報営業：川崎映子、久保風竹、奥村和代、山口 彩、井上由姫、春原有希、穴戸円、桑原佳菜子

経理：萩原佑美、中里史絵

舞台芸術祭「秋の隕石2026東京」

ドラマトゥルグ：山口真樹子、羽鳥嘉郎

オブジェクトシアターキュレーター：山口遥子

アーティスティック・ディレクター補佐：関 あゆみ

広報ディレクション：松本花音（合同会社PUB）

広報：山本さくら、奥村圭二郎、長田ポンシリ・アリサ、甲斐美奈寿、佐藤 瞳、園田祥子

クリエイティブ・ディレクション：NEW Creators Club

WEB：志村徹朗、塩見海怜、株式会社HERENGA

翻訳：Art Translators Collective、許斐紀子

アクセシビリティ：大島尚子

票券：金網久美子、大村昭順（株式会社ヴォートル）